

萬里たゞ一色に碧を凝らして、さながら一面の瑠璃板を張れるが如く、涼氣水の如く肌を通して、快きこと言ふばかりなし。雲は全く影を斂めて、玲瓏たる五日の月は、清らかに差し上りぬ。夜の間の露は、萬點の雨の名残と、しげく若葉に宿して、冴かなる星影は黒う澄める池の面に銀砂子を散らせり。遠近にははや蛙の鳴くこゑ聞ゆ。

(雨評) 筆また驟雨迅雷の勢ひあり。天とす。

地

園遊會

岩代須賀川本町 服部貞子

師の君の開會の辭終りて、音楽隊面白き越後獅子は始まりぬ。赤のたすきに白の前掛お揃ひの君々は、各々店に入りて、やさしき聲に客を呼ぶ、さてもお可笑げなるよ。
 お團子屋
 藤棚を其まゝにて、長き腰掛は、はやう客を乗せ居ぬ。花房は五分通り開きて、うつくしく白き頬をなづる心地よさ、まして、主任は彼の清子の君、白き前掛うつ

りよく、白き面をほの赤うさしてお働さぶりいらつしやいよう！」のほゝ笑みには、誰れしも引き入れられか。

お蜜柑屋

あるじは幸子の君、築山の上の芝生に、笹もてさゝやかにしつらひたれど、ゆかしきは、其の味なるよ、かわさし口には、此の上なら……こゝなかくの賑ひなり。

彼方の笑ひ聲は……オ、落語家ならんか。

葡萄酒屋

池に臨める吾妻屋の中央に、テールブルを据えて、椅子五六脚、こゝは大抵師の君方のみなり。出でんとすれば、繁子の君「まあ先生ちツとしてお出でなさい！」とつきつくるはコツプ。すさまじきことよ。

おすし屋

白と淺黄の幕に圍みたる岡の上。主任は松子の君にて通る人々を無理に引き入れて進め給ふなれど、手をのける人は、あらばこそ、箸もつけず。……後にて大笑ひしぬ。

折しも演劇開始のベルの音しきりなり。あたゝかき風小波をたゝせて、皆人の足を彼方に、聞ゆるこたびの

の姿。こゝは實に彼等が毎朝の出逢ひ場所である。馬の新たに友を得ての嬉しさに、互に勇み立たその嘶きは、

『木の根、草の根、萱の根越えて、

越えて逢ひたや方様に』

と少女等が唄つた唄に和したのである。

(雨評) 郊外の曉、ゆかしき情致の忍ばるるものあり。

○庭 春

鳥取市 上山千重子

調ぶる琴の音、いみじう亂れて、心地なやましき折柄
ひらく離の紅梅東風に舞ひ込ぬ、と見るまに、友禪
の座蒲團に心地よげに居眠る、末の妹の艶やけき黒髪
に、はらりと斗り……。いひ知らず興づきて、さし
て廣からぬ我が庭もせの、春を尋ねまほしう、なやみ
も打ち忘れられて、ソト庭に下り立ちぬ。三日見ぬ内
なにとやらんいひし、げに先つ日、兄上の寫生の料に
もと求め給ひし時には、心なきまで堅く結びし梅の蕾
の、はやそよ風にも得たへて、散來なるは、はかなき
は花の命ぞかし。さあれ、一枝手折りて、夜半の嵐に
口惜しからぬやう、瓶に挿し、さなりくと足つま立
て、ふりよきを選む折りふし、いづ方となくもるゝ唱
歌の聲。靜かに耳とむれば、それよ、鶯の初音にも似
し、金魚のひれて波たつ池に、帆かけて走るつけぎの

船……」と、さても主や誰れ、愛らしの歌の響きか
な。あはれ我が方に近づき來るよと思ふまに、にくや、
はたとやみぬ。突然後ろより姉さまと、やさしき妹の
聲。驚きてふりかへれば、櫻色の頬に笑くほ深く、「ア
姉さま、いま金魚に餌をやつてよ」。さきの梅の花び
ら、なほ御下髪にとまりて。

(雨評) 寝れたる妹の黒髪にとすりたる花を以て起し、なほ御下髪に
とまりたるまゝの花を以て、結びたるところ、面白しといふべし。

○寫生帖の一ふし

麹町區 重田春子

菜の花の黄、麥浪の青さに連り、雲雀は空高く舞ひて
又、下る。遠山かすみ、近山ひくし。清流ちさき音を
立てて、岸に接吻し、石にささやきつゝ、流れ流れて
森に入り、その果を知らず。一農家の竹籬、只一本の
櫻咲けり。胡蝶散る花を追ひ、ちる花胡蝶を追ふ。水
車ゆるくめぐり、はねつるべ音なくして、小犬垣根に
眠り、少女椽にまりをつく。

寫生の題に出でし櫻、我は少女の袖にちりかゝる一枝
を乞ひて右手にもちつ、門をいづれば、日は西に沈ま
んとし、家路にかへる農夫の鍬の柄にかゝりやけり。
あゝ詩材多き里よ、とはに健在なれと、ひそかに祈り
つ。靜にのぞめば、老櫻樹影を清淺に水によこたへ、
黄昏一片の月をそへて、暗香四方に浮動す。我手なる